新大広報 BackNumber

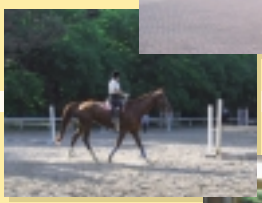
▼149号〈特集：新潟大学を観てみよう〉
▼150号〈特集：あさひまち物語〉
▼151号〈特集：新大での思い・・・・・・〉
▼152号〈特集：新生活応援〉

バックナンバーが欲しい方は、事務局の学務部学生生活支援課まで受け取りに来て下さい。新大広報のバックナンバーは、http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/index.htm でも見ることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

編集スタッフ

長い間、大学事務に携わってきましたが、こんなに感激した仕事はそうありません。3人の先生方の取材に際し、あまりにも情熱的で、しかも教養教育の重要さ、学問に向けてのひたむきな姿勢、後進国医療支援というボランティア精神等、私は大変感動しました。学生諸君こそ、こういう経験をして欲しいと思います。
●若井　国夫（学務部学生生活支援課）

今回、初めて新大広報の編集スタッフとして先生方の取材に同行させていただき、その研究・社会活動等に対する深く熱い思いを直に感じることができたのは、とても貴重な体験でした。新潟大学には、本当に素晴しい先生方、素敵な諸先輩がいます。次号以降も、新潟大学の様々な顔をお伝えすることができればと思っています。
●石井　薫（学務部学生生活支援課）



新潟大学広報誌 Campus Forum

Niigata University Campus Magazine 新大広報

学生編集委員 募集!!

新大広報の編集委員は就職活動に有効です!!

■問い合わせ先：学生生活支援課（262−6089）
または各学部の広報委員まで。

編集後記

この4月より編集委員の方が一部替わりました。この私も2年振りに編集委員として新大広報を制作することになりました。教員、事務職員、学生（現役、卒業生）、それぞれの特徴ある活動と個性を新大広報の誌面に反映していきたいです。
今回取材させて頂きました内藤眞教授、周藤賢治教授、藤井隆至教授には、お忙しい中、ご協力していただき誠にありがとうございました。先生方の熱意を限られた誌面に収めるのに苦労しました。（編集委員長　寺田員人）

今の時代は、大学の組織にも研究内容にも大きな変革を求めています。心地良くしかも刺激的な学究的環境と学生の学びを熱心に支援する組織的環境を、新潟大学がどのように整えているのか。キャンパスフォーラム153号は、そのことを内外にお知らせしようと編集しました。オープンキャンパスに来学された諸君にもぜひ目を通していただきたいと思います。（編集委員　石坂妙子）

私自身はいつも名ばかりの編集委員で反省しきりですが、この号は他の熱心な編集委員の方々のご努力により、大変すばらしい内容豊富な号に仕上がったと思います。大学の看板としてご活躍の先生方の人となりが伝わってくるのではないでしょうか?あらためて取材にご協力いただいた先生方や諸先輩に感謝申し上げます。
（編集委員　牛木辰男）

本誌の編集に関わる人達と接して、改めて大学のことを考えました。今年4月から国立大学は無くなり我が新潟大学も国立大学法人になりました。これまでと違うのは、大学を構成している一人一人が大学のことを真剣に考えないと新潟大学といえども無くなる可能性があることです。現在学んでいるあなたも例外ではありません。社会は卒業生の質を評価します。製造者責任が問われることはもちろんですが、あなたもしっかり勉強しないと母校が無くなるかも。（編集委員　﨑村建司）

広報委員会第1部会

● 部会長・編集委員長	寺田　員人（医歯学総合病院）	Tel 227-2975	tera@dent
● 委　員	石坂　妙子（教育人間科学部）	Tel 262-7116	ishizaka@ed
	岡田　昌浩（法学部）	Tel 262-6545	okada@jura
	柳　喜重郎（経済学部）	Tel 262-7660	yanagi@econ
	徳江　郁雄（理学部）	Tel 262-6112	itok-pc@chem.sc
	牛木　辰男（医学部医学科）	Tel 227-2058	t-ushiki@med
	川瀬　知之（歯学部）	Tel 227-2927	kawase@dent
	新保　一成（大学院自然科学研究科）	Tel 262-7543	kshinbo@eng
	﨑村　建司（脳研究所）	Tel 227-0619	sakimura@bri
	岩本　義男（学務部長）	Tel 262-6080	iwamotoy@adm

● 事務局（学務部）　Tel 262-6089　Fax 262-7516　korisi@adm.
（E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。）

● 新潟大学ホームページ　http://www.niigata-u.ac.jp/

この広報は再生紙を使用しています。

Campus Forum Niigata University Campus Magazine 新大広報
no.153 2004.8月号

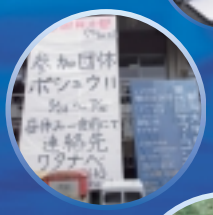
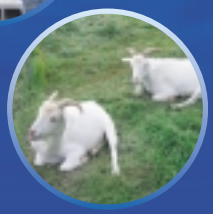
編集　発行　新潟大学広報委員会　新潟大学学務部

印刷　株式会社　博進堂

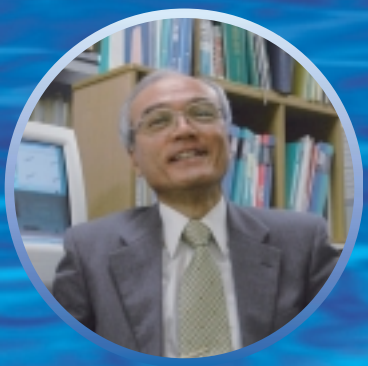
新潟大学広報誌
Niigata University
Campus Magazine

Campus Forum

新大広報

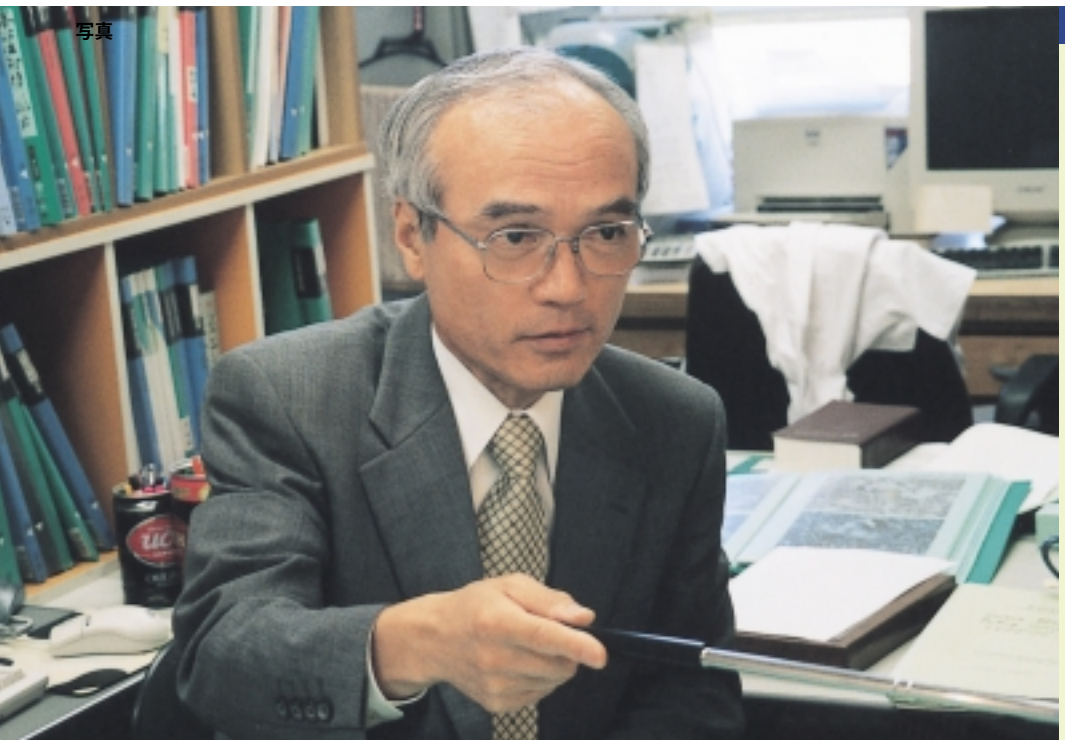
Open Campus



no.153
2004.8月号

INTERVIEW
教授に聴く
研究

地球を掘る
ー日本海の形成とマグマの活動を探るー



写真

■ プロフィール

理学部
地質科学科地球物質科学講座
周藤　賢治 教授
SHUTO Kenji

専門分野：岩石学
研究課題：①日本列島及び環日本海地域の新生代火山岩の生成
②日本海の拡大とマントルダイナミクス

理学博士。1944年生まれ。1968年3月東京教育大学理学部卒業、1974年6月同大学理学研究科博士課程修了。1981年2月～1983年3月新潟大学助手、1983年4月～1991年3月同大学助教授、1991年4月同大学教授就任。日本地質学会研究奨励賞（1976年）、地学団体研究会地球科学賞（1992年）を受賞。日本岩石鉱物鉱床学会（評議員、編集委員）、日本地質学会（評議員）、統合国際深海掘削計画、科学計画・方針監理委員会委員。

地質年代表

古生代	5億7千万年前
	カンブリア紀
	オルドビス紀
	シルル紀
	デボン紀
	石炭紀
	ペルム紀
中生代	2億5千万年前
	三畳紀
	ジュラ紀
	白亜紀
新生代	6500万年前
	第三紀
	200万年前
	第四紀
	現在

地球表層部

――まずは、先生の研究内容をお聞かせください。

私が長い浪人時代を終えて新潟大学で研究を始めたのは1981年、36歳からです。最初の10年ほどは東北日本の第三紀（約6500万～200万年前）の火山岩を、最近の10年間は北海道や瀬戸内地域の火山岩の研究を進めています。

――火山岩の研究を始められたきっかけは？

1960年代の初めに、この分野の研究の第一人者だった東大の久野久先生が、日本列島の第四紀（最近の約200万年）の玄武岩の成因についての考えをまとめられ、先生はその考えが第三紀の玄武岩にもあてはまることを指摘しました。

しかし、当時、第三紀の玄武岩のデータは大変少なかったので、私はこの考えに本当かなと疑問をもち、これらの玄武岩について徹底的にデータをだせば新しい事がわかるのではないかと思い、

新潟大学での研究を始めたわけです。

東北日本の研究では、最初は青森、次に秋田、山形、岩手、さらに宮城、福島、新潟というふうに北部から南部へと対象地域を拡大して行きました。研究内容は、まず地質調査によって各フィールドでの火山岩の積み重なりを明らかにし、偏光顕微鏡による火山岩の薄片観察、火山岩の化学成

⬆理学部校舎前に展示されているマントルのカンラン岩（手前）や下部地殻の変成岩（奥）。いずれも北海道日高変成帯のもの。

➡新潟県間瀬海岸に露出する中期中新世（約1400万年前）のドーム状デイサイト（柱状節理が発達）を調査する地質科学科1年生。

分の分析などを行い、学生・院生と共同でこれらの研究を東北日本各地で展開しました。

――青森から新潟にまたがる東北日本の研究で、どんなことがわかりましたか？

データが積み重なってくると次第に面白い事がわかってきました。東北日本の第四紀の火山は大きく見ると、南北に帯状に2列に並んでいますが、各列の火山ごとに構成する玄武岩の化学成分が異なっていて、太平洋側の火山（恐山、蔵王等）から日本海側の火山（月山、鳥海山等）に向かって、玄武岩中の化学成分に、K_2O（酸化カリウム）量が増加するなど、規則的な変化がみられます。

久野先生は、この傾向は第三紀の玄武岩にも適応されると主張しました。私達の研究によって、1200万年前あたりの玄武岩までは、第四紀の玄武岩と似た化学成分の変化があることがわかりました。しかし、第三紀で最も火山活動が活発に起こった約1500万～1300万年前の玄武岩では、それ以降の玄武岩と違い、K_2O量が日本海側で低く、太平洋側で高いという逆転傾向がわかったのです。

この結果は久野先生の見通しと違ったので、私は大きな感動をおぼえました。1500万～1300万年前は、日本列島がユーラシア大陸から引き裂かれ、水平的に移動して現在の位置にもたらされつつあった時代「日本海の拡大」に相当します。

――変化を発見した後、研究に変化はあったのですか？

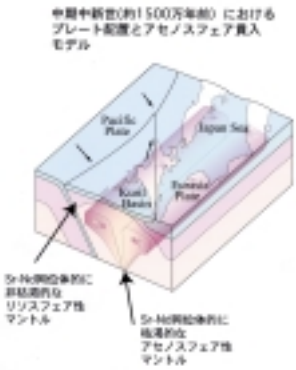
さらにその要因をさぐるために、それまで採取した玄武岩について、院生とともにSr同位体比（$^{87}Sr/^{86}Sr$）とNd同位体比（$^{143}Nd/^{144}Nd$）の測定に取りかかりました。当時の新潟大学には同位体比を測定するための表面電離型質量分析計（マス）は設置されていなかったので、鳥取県三朝の旧岡山大学地球内部研究センターや秋田大学鉱山学部のマスを使用させていただきました。

この同位体比の研究で重要な事実が明らかになりました。それは、東北日本の日本海側に産出する玄武岩のうち3000万～1500万年前の古い時代のものはある一定のSr同位体比とNd同位体比をもつのに対して、1500万年前よりも若い時代の玄武岩の同位体比は古い時代の玄武岩とは大きく異なることが明らかになったのです。

玄武岩質マグマはマントルのカンランが溶融して生じるものですが、私は1500万年前を境にした玄武岩の同位体比の急激な変化は、日本海の拡大の原動力となったマントルの対流によって、東北日本の日本海側直下のマントル物

【火山岩】
マグマが地表または地表に近い所に噴出してきて冷え、固まってできた岩石。玄武岩・安山岩・デイサイト・流紋岩など。噴出岩。

【同位体比】
ほとんどの元素には、化学的性質を決める陽子の数（原子番号）は同じであるが、質量数（陽子と中性子の数を加えたもの）の異なる原子が存在する。これらを同位体という。Srはストロンチウムでアルカリ土類金属の一つ。Ndはネオジムで希土類元素の一つ。



質が1500万年前あたりを境に大きく変化したことに原因があると考え、このことを1993年と1994年に論文として発表しました。

その後、北海道北部にも第三紀の玄武岩が広く分布していることから、これらの研究に学生・院生と1993年から取りくみました。北海道の玄武岩の研究は、これらの玄武岩にも東北日本の玄武岩と同様に、日本海の拡大やオホーツク海の拡大に伴って活動したマントル物質の影響があるだろうという確かな展望のもとに行いました。その結果、北海道北部に活動した1200万年以降の玄武岩質マグマはオホーツク海の拡大に関係して流動したマントル物質から生成された可能性が強いことが明らかになり、その結果をこれまでの東北日本との結果とを総合して2004年に論文として公表しました。

このように、日本列島のマグマの活動は太平洋プレートの沈み込みが引き金となって起こるだけでなく、特に北海道や東北日本の日本海側で起こった1500万～1200万年前のマグマの活動は日本海やオホーツク海の拡大を引き起こしたマントルの活動によることが明らかになったのです。これは1960年代には考えられなかったことです。

――先生の研究の側には常に学生さんの存在がありますね。

私のこれまでの研究成果は、多くの学生や院生に支えられてきたと思います。研究者の義務と科学研究費を獲得する目的も兼ねて、研究成果はそのつど公表してきましたが、自信をもって胸をはれる論文は10年に1～2編しかないものだなと痛感いたします。また、私の研究では大型の分析機器の整備が不可欠ですが、幸いにして1995年に蛍光X線分析装置と表面電離型質量分析計を、2003年には新潟大学プロジェクト推進経費で、ICPマスを整備することができました。これらの分析機器は、これからも多くの教員や院生の間に利用され力を発揮して行くでしょう。

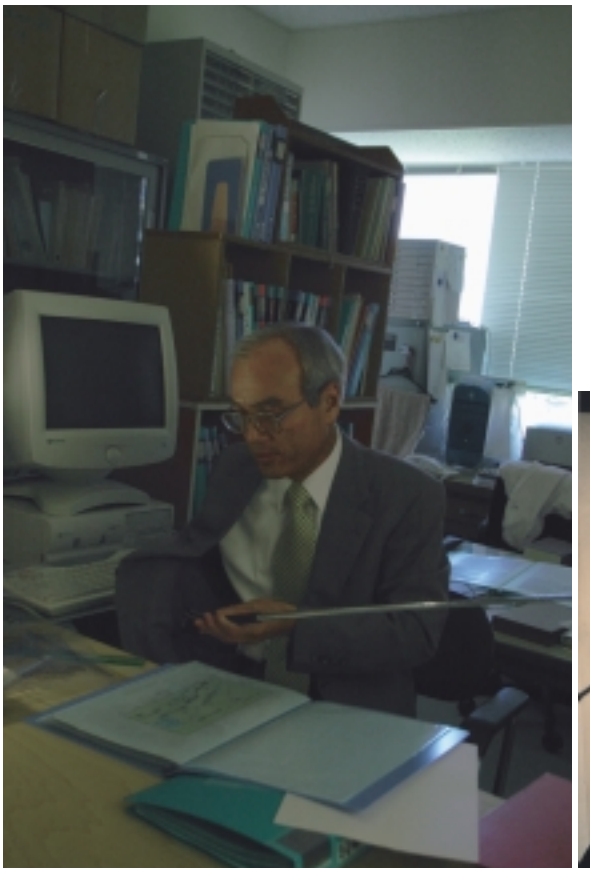
私が研究の過程で楽しむことができるのは、なんといっても野外調査で学生・院生と親しく飲食し、語ることができるという点。感動するのは今までの範疇では解釈できない岩石や事実を見出したとき。安堵感をおぼえるのは、卒業論文、修士

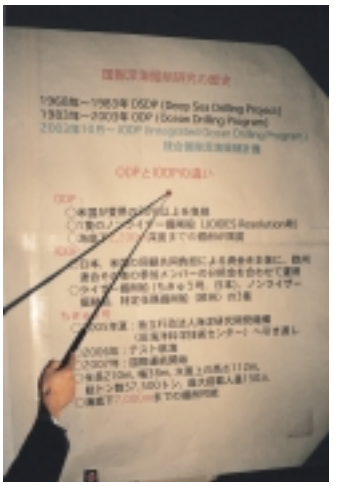
「地殻・マントル構成物質」（周藤賢治・牛来正夫著/共立出版株式会社）

他に、『Sr同位体岩石学』（共著/地学団体研究会）、『地殻・岩石・鉱物第2版』（共著/共立出版）、『記載岩石学』（共著/共立出版）、『解析岩石学』（共著/共立出版）がある。

理学部
周藤賢治教授

⬇現在建造中の掘削船「ちきゅう号」。海底下7000mまでの掘削が可能。
（画像提供：独立行政法人海洋研究開発機構）





私のこれまでの研究成果は、多くの学生や院生に支えられてきたと思います。

論文、博士論文を完成させた学生の顔をみるときで、特に博士論文を発表した院生（これまでに12名が博士論文を提出）の満足感に充ちた顔つきをみるとほっとするものです。

――国際的に関心が持たれている、掘削船「ちきゅう号」について、お聞かせください。

2003年10月からIODP（統合国際深海掘削計画）が動きだしました。この深海掘削はこれまでの米国主導にかわって、米国、日本、ヨーロッパが対等な立場から掘削計画をたてて実施するものです。

現在、日本ではこの国際的な深海掘削の中心を担うことが期待される掘削船「ちきゅう号」を建造中です。これまでの米国の掘削船は、最深で海底下2200m程度までしか掘削することができませんでしたが、「ちきゅう号」は海底下7000mまでの掘削が可能です。現在、世界中の研究者が、掘削計画を立案しています。「ちきゅう号」による日本海の海底下の掘削にも大きな期待がよせられています。それは、日本海の北部は地殻の厚さが薄いので、直接、マントルまで掘り抜くことが可能だからです。

日本海のマントル物質を調べることによって、私が提唱した、玄武岩をもたらした仮想的なマントル物質と同位体比などを直接比較することができるので、私はこの点からも日本海の海底下の掘削に大きな期待をもっています。2004年度中には、新潟大学、富山大学、金沢大学を中心とした研究者が集まって、日本海及びその周辺の地質についてシンポジウムを開催する予定です。その上にたって、日本海の深海掘削計画を立案することにしています。

「ちきゅう号」は2007年から国際運航を開始します。「ちきゅう号」の活躍によって、海洋地殻、海底下の地下生物圏、エネルギー資源のガスハイドレートなどの実体の解明が飛躍的に進展するものとして世界中から注目されています。若い学生や高校生の皆さんも、21世紀のビッグ科学プロジェクトが目指す“海底下の未知の世界の解明”に夢をもって取り組んでみたいとは思いませんか。

INTERVIEW
教授に聴く
研究

ミャンマーへの医療支援
―帰国した留学生の想いに応えて―

■ プロフィール

大学院医歯学総合研究科
細胞機能講座分子細胞病理学分野
内藤　眞 教授
NAITO Makoto

専門分野：病理学
研究課題：①マクロファージの発生分化と生体防御機構
②動脈硬化の病理

医学博士。1947年生まれ。1972年3月福島県立医科大学医学部卒業、1976年3月同大学大学院医学研究科博士課程修了。1984年4月～1988年10月熊本大学講師、1988年11月～1992年10月同大学助教授、1992年10月新潟大学教授就任。新潟県特定疾患協議会委員、日本病理学会（評議員）、日本リンパ網内系学会（理事）、動脈硬化学会に所属。2002年「ミャンマーの医療を支援する会」を設立。現在代表を務める。

いろんなものを届ける国際宅急便のようなことをしています。

――内藤先生の専門分野について、具体的にはどんな研究をしていらっしゃるのですか？

病理学といって、例えば胃がんの手術をしたときにその胃がありますね。それを標本にして、顕微鏡で見て、どういうタイプのがんで、どこまで広がったかということを診断します。また、病気で亡くなった方を解剖して、病気がどういうふうに広がっていたとか、そういうことを調べるのを人体病理といいます。人間の病気を直接扱う分野です。病院の中にも病理部があります。私はそれに加えて動物実験などもやっています。

――内藤先生が「NGOミャンマーの医療を支援する会」を立ち上げた経緯は？

今から9年前、ミャンマーから1人の留学生がやってきました。彼女の名前はヤデナ・キャウ。4年間の在学期間を終え、帰国後首都ヤンゴンで医師として働いていた彼女から何度か手紙をもらい、ミャンマーの劣悪な医療事情を知りました。ちょうどその頃、国際医療協力事業にたまたま参加しまして、その一員としてヤデナ医師が働いているヤンゴンを訪れました。現地であまりにもひどい医療状況を目の当たりにし、その中で非常に苦労しているヤデナ医師を見まして、少しでも何かできないかなと思いました。

初めは、私の研究費で試薬を持参し、検査技術指導を行っていましたが、研究費が切れ、その後の活動を思案していたら、ヤデナさんが在日中に知り合った津川の新善寺の畠山住職が働きかけて

➡いつでも出発できるように教授室に備えてあるスーツケース。

⬆何もない病室で結核患者を診察するヤデナ医師。新潟との絆は彼女の支えとなっている。

➡支援物質を満載したスーツケースを前にしたスタッフとボランティア。（成田空港　2003年9月2日発）

くださり、京都の仏教クラブから100万円の寄付金をいただいたんです。それで、我々が降りるわけにはいかないと思い、心を決めて「ミャンマーの医療を支援する会」を立ち上げたのです。

――「ミャンマーの医療を支援する会」とは、どんなことをしていらっしゃるのですか？

一言で言いますと、いろんなものを届ける国際宅急便のようなことをしています。具体的には、結核の薬や試薬品、顕微鏡やデジタル体温計などの医療器具をヤデナさんの勤務する病院に届けています。やはり、自分たちが直接持っていくのが一番確実ですからね。

――1回の渡航では大体何日間ぐらい滞在されていますか？

5、6日です。我々が行ってやれることは、とにかくものを運ぶことと、講習会をやることです。実際の診療をやるのは彼女をはじめ現地の医師ですので、みんなが必要なものを託して帰ってきます。一往復すると1人20何万かかりますので、4人で行けば100万円飛ぶわけですね。それに見合うだけのものを持っていかなければ効果が少なくなってしまいます。

最近気がついたのは医学書が不足していることです。日本でも医学書は高いですけど、あちらでは目の飛び出すような値段になるわけですね。それで英語の医学書を少しずつ持っていくようにしたのですが、またこれがこんな分厚くて重いんですよ。

――学生相手に講義などの活動はなされているんですか？

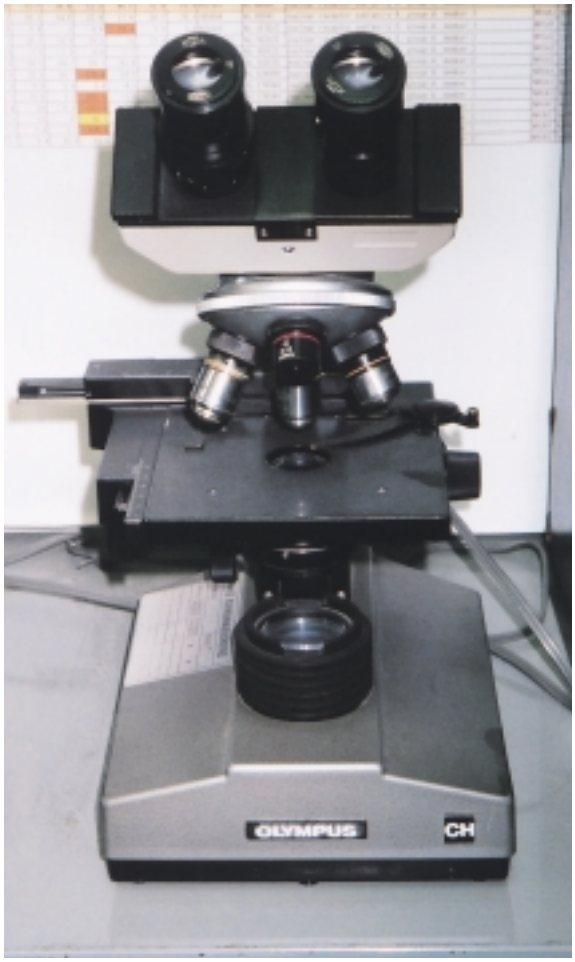
これからやってみようかなと思っています。向こうの医科大学というのは全国で4つしかないんです。1学年は日本では100人ですよね。医者も看護師も増やそうというので、それが500人になっていて、講義はいいけれども実習はほとんどできないみたいですね。ですから我々が持ってい

我々が行ってやれることは、とにかくものを運ぶことと、講習会をやることです。

⬅結核菌を観察する検査技師。単眼の古い顕微鏡が唯一の頼り。

支援してくださる人たちの気持ちをお届けすることも大事なことだと思っています。

⬇払い下げられた医学部の実習顕微鏡。手入れをし、変圧器、予備電球を添えてヤンゴン大学医学部へ10台寄贈。すべて手持ちで運んだ。



った顕微鏡も学生実習というよりは、学生の試験のために使っていると聞きました。

――新潟大学の医学部の学生は、向こうへ同行されていらっしゃいますか？

その機会はまだありません。自分で行きたいと言うんだったらいいんですが、そこまでこちらは負担できませんので。自分で渡航費や滞在費を負担して、一緒についてくるというんだったら喜んで連れて行きますよ。

――内藤先生たちの活動への支援やサポートはあるのですか？

日本の製薬メーカーにお願いして数社から100人分の結核の薬や抗生物質を頂いて、それをミャンマーに運びました。企業は、確実に責任あるシステムで届けていくことがわかれば協力してくれます。抗結核剤なんかは全部ただでもらって、持っていくわけですから、私たち国際宅急便がどれだけ信頼されるかどうかは大きいですね。

先ほどの京都の仏教クラブの寄付もそうです。また、昨年、私たちの活動がテレビに放映されて以来、10数口の寄付をいただきました。毎月3000円を送ってくれる新潟市内のおばあちゃんもいます。そういう人たちの気持ちをお届けすることも大事なことだと思っています。

――ミャンマーの医療現場の現状は？

一番の問題は、結核なんですよ。結核患者が野放しになっていて、十分な治療を受けていないという状況で、結核の感染の機会がとても高いのです。病院の中で医療関係者まで感染するという現状です。医療関係者も認識はしているのですが、マスクや手袋などが非常に不足しているのです。

また、電力事情が非常に悪いです。病院でもし

⬇ヤデナ医師の働くサンピュア総合病院（ヤンゴン市）。きれいな草花が咲き誇る庭とは対照的に外壁はカビだらけ、下水は垂れ流し。

大学院医歯学総合研究科
内藤　眞教授

大きいことをやるのではなくて、小さいことを長く続けることを大事なこととしてやっていきたい。

ょっちゅう停電します。私たちが集めた検体なども冷凍庫に保存していたのですが、2日間停電で止まってしまい、だめになってしまいました。断水もありますし、社会インフラが悪いので、設備が整っていません。患者さんは、病院に行って診察までは無料なんですが、薬は各自購入するということで薬が買えない人が多いのです。そういうのが大きな問題ですね。

――ミャンマーの医療支援で大事なところは何ですか？

感染症に対する検査と、治療に対する支援です。今のところ直接ものを持っていくという仕事ですが、本当はもう少し細菌学や内科の専門家が一緒になって検査や研究などもできればいいなという点と、ある程度大規模な設備を備えられるようにしてあげられればいいなという点です。設備投資までは我々はできませんから何らかのチャンスをねらうしかありません。

――今後のミャンマーへの医療支援の展望はありますか？

ミャンマーの医療の現状を見たり、活動を通して、研究成果をまとめたいと考えています。

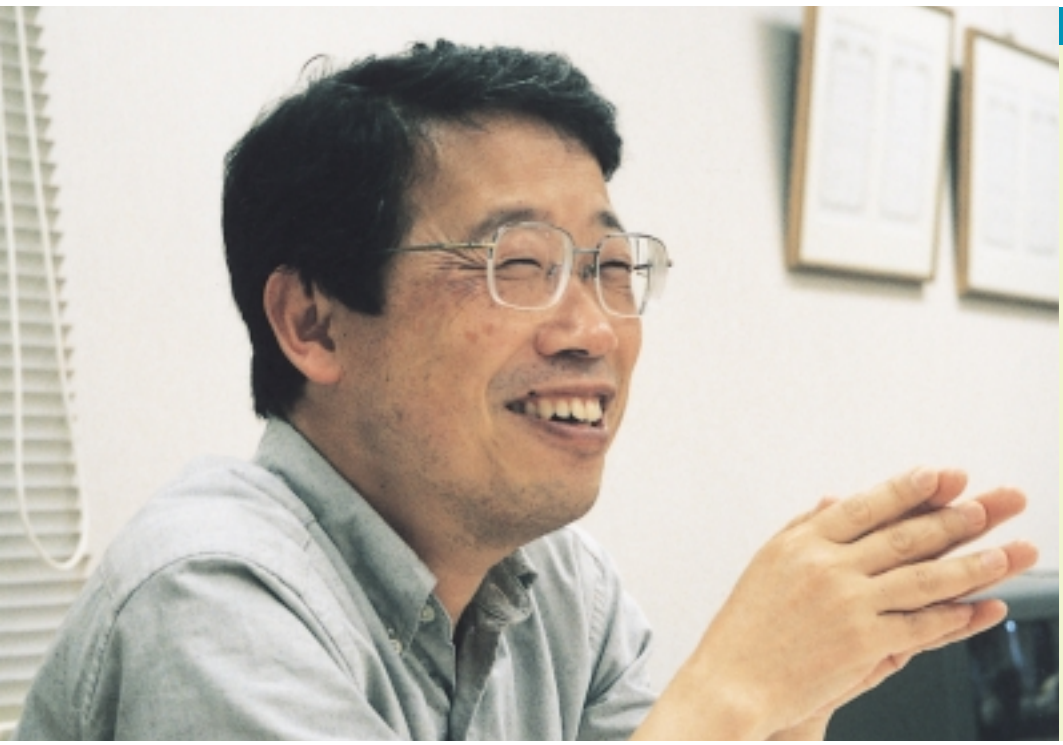
何らかの研究成果を出したいという一番の理由は、昨年とることのできた科学研究費を続けて取得して、活動を続けたいという気があるからです。支援活動と研究活動を通じてミャンマーの医療に貢献したいですね。

大きいプロジェクトですと、3年とか5年とかで切りますよね。後は現地の人たちの自立を促します。でも基盤が弱いので大抵自立できないんですよ。だから僕らは大きいことをやるのではなくて、小さいことを長く続けることを一番の目標というか、大事なこととしてやっていこうと思っています。

⬇ミャンマーの医療を支援する会（JAPHM）
http://www.med.niigata-u.ac.jp/pa2/welcome.html

INTERVIEW
教授に聴く
研究

柳田國男を書くために
ー指導いただいた先生方との関係ー



■ プロフィール

大学院現代社会文化研究科
地域社会形成論専攻地域社会論大講座
藤井　隆至 教授
FUJII Takashi
専門分野：日本経済文化論
研究課題：近代日本の経済思想

経済学博士。1949年生まれ。1967年東京大学入学、1971年同大学大学院経済学研究科入学。1980年新潟大学に着任。経済学部長を経て、2001年より大学院現代社会文化研究科長。1989年に経済学部で「一日体験入学」（現在のオープンキャンパスに相当）を企画、NHKの全国ニュースで放映され、数年で全国の大学に普及する。

同じ先生の授業を何年も聴いていると、学問の奥の深さが伝わってきます。

――藤井先生の研究というと、まず柳田國男です。経済畑の藤井先生が、どのような方法で柳田國男を研究してこられたのかお聞かせ下さい。

柳田國男についてたくさん書いてきましたが、代表作は『柳田國男　経世済民の学――経済・倫理・教育』です。この本を書くために、何人もの先生からご指導をいただきました。きょうは、そうした先生方との関係をお話させていただきましょう。

――ご本の副題に「経済・倫理・教育」とありますが、「民俗」はないのですね。

柳田の学問は「経世済民の学」であり、その体系は経済学・倫理学・教育学が論理的に結びついている、というのが私の説です。いいかえれば、民俗学と理解するのは誤解だという説でもあります。「経済」は関口尚志先生の経済学、「倫理」は佐藤俊夫先生の倫理学、「教育」は大田堯先生の教育学が基礎になっています。しかし私なりに換骨奪胎してあります。

柳田國男は人文科学・社会科学にまたがる広大な領域の学問を開拓した人ですが、その学問を重心の位置で支えているのは倫理学です。柳田國男の学問は倫理学であって民俗学ではない、この柳田理解は、教養時代に佐藤先生の「倫理学」を聴講したのがヒントになっています。新潟大学でいえば、全学共通科目の位置にある科目でした。

佐藤先生は和辻哲郎の教え子で、和辻倫理学を発展させようとしておられました。授業では、佐藤先生の『倫理学』『習俗』と和辻の『人間の学としての倫理学』を使いました。「習俗は倫理の基底をなす」というお考えで授業を進めておられました。カント哲学の用語は私にはチンプンカンプンでしたが、先生のお話には不思議な魅力があって、いつまでも心に残っていました。大学院生

柳田國男を読みあぐねて苦悶していたとき、ハッとひらめくものがあり、「これは倫理学なんだ！」と気が付きました。

のとき、柳田國男を読みあぐねて苦悶していたとき、ハッとひらめくものがあり、「これは倫理学なんだ！」と気が付きました。それから、佐藤先生のご本を何度も読み返しました。

――柳田國男を研究することに決めたのはいつですか。

経済の大学院入試に合格してからです。私は大学2年のときに学園紛争を経験した紛争世代に属しています。3年生になって西洋経済史の関口尚志先生の演習に参加しました。関口先生は大塚久雄先生の教え子で、演習ではマックス･ウェーバーの宗教社会学を中心に勉強しました。ウェーバーの著作やウェーバーについての研究書をたくさん読みました。

柳田國男は経済学でも大きな仕事をしていますし、もともと私は宗教社会学を勉強していたものですから、経済の大学院で柳田國男を研究することにそれほどの違和はありませんでした。当時の東大経済の大学院は指導教官制が廃止されていて、学生は全員が一匹狼にされていました。指導教官制が存在していれば、当然ダメと言われていたと思います。経済学部の先生で、柳田國男について指導できる人はいませんでしたから。

しかし逆説めいていますが、指導教官制が廃止されていたおかげで、私は多くの先生から、学問の面でも人間の面でも、懇切な指導を受けることができました。大学院では関口先生のところで引き続きウェーバー中心の勉強を続けていましたが、そのほか、ここでは、教育学の大田堯先生と民俗学の宮田登先生のお名前をあげさせていただきます。

――お二人とも他大学・他学部の先生ですが、どのようにして勉強したのですか。

大田先生の場合、修士課程2年のときから先生が退職なさるまで、4年間にわたって教育学の大学院の授業に出席しました。とりわけ大田先生からは、人間形成の面でも深い影響を受けています。大田先生のお声に接することができただけでも、柳田を研究してよかったと思っています。

4年間も大田先生の授業に出席していたのは、単位の取得と関係なかったからです。最初の1年は他研究科聴講で単位を取りましたが、それ以降は“盗聴”といって、聴講手続きと関係なく、一方的に聴講していました。いってみれば、押しかけ学生です。

「柳田國男　経世済民の学ー経済・倫理・教育ー」（藤井隆至著／名古屋大学出版会）
絵：和田英作「渡頭の夕暮」
文字：石川九楊

大学・学部は関係なく、“聴きたい授業を聴きたい”“もっと深く知りたい”。誰もがアナーキーになるほど閉塞した学生時代でした。

――盗聴というのは、先生の命名なのですか。

いいえ。私の周辺の人はみんなそのように呼んでいました。学園紛争が終わったあと、若者たちは学問に活路を求め、いろいろな試行錯誤を続けました。そのひとつが盗聴と呼ばれた勉強の仕方でした。もちろん教員側も、そのような制度外の学生を快く受入れていました。関口先生の授業にも、社会学や政治学の学生・院生が盗聴に来ていました。

法政大学の外間守善先生の授業を1年間盗聴したことがあります。「沖縄文学論」でした。あるとき、外間先生が、私たち学生を沖縄料理店に連れて行ってくれました。食事のあと、学生だけで喫茶店に入り、そこではじめて自己紹介したのですが、なんと、半数以上の学生が盗聴学生でした。大学・学部は関係なく、“聴きたい授業を聴きたい”“もっと深く知りたい”、そういう純粋な動機で盗聴したのです。誰もがアナーキーになるほど閉塞した時代でした。

――宮田先生の授業も盗聴だったのですか。

そうです。民俗学を勉強するために、東京教育大学の竹田旦先生の大学院の授業を盗聴しに行きました。他大学でもあり、竹田先生に学部の授業を盗聴させてほしいとお願いしたのですが、大学院の授業に出席するよう勧めてくださいました。おかげで福田アジオさんはじめ、民俗学専攻の何人かの大学院生と知り合うことができ、その後の私にとって大きなプラスとなっています。当時、宮田先生は助手でした。

東京教育大学が廃校になったあと、宮田先生は筑波大学に移られ、東大文学部へ非常勤講師として教えに来られました。ですから、ずいぶん長い期間にわたって盗聴してきたことになります。同じ先生の授業に何年も続けて出席していると、学

大学院現代社会文化研究科
藤井隆至教授

⬇経済学部演習風景

問の奥の深さのようなものが伝わってきますし、人間性の面でも強い感化を受けるようになってきます。私が新潟大学に赴任したあとも、個人的な指導は続きました。宮田先生には、新潟市の「市民講座」で民俗学の講座を私が企画したとき、講師として東京から来ていただいています。

――教育学の大田先生や民俗学の宮田先生など、ずいぶん幅広い指導を受けてこられたのですね。先生のお仕事をお伺いしていますと、自分が求めるテーマをひたすら追求してこられたという印象を受けます。「教養」本来のあり方を感じさせます。

そうかも知れません。私の場合、今風のことばを借りると、“自分さがし”と結びついています。学際性を帯びているのはそのためです。学園紛争が全面敗北したあとを受け、自分の研究を追求すること自体が自分さがしとなっていました。知識の修得が人間形成と結びついている点では、私の研究スタイルは「教養」的かも知れません。

ただ、いうまでもないことですが、「教養とは何か」を考えて勉強してきたわけではありません。私はたんに、心の渇きを満たすために勉強しただけです。大学院時代のことですが、「飢え死にした院生はいない」という言葉が上級生から下級生に語り継がれていました。目先の損得にまどわされることなく、初心を貫くためにトコトンがんばれ、という意味で、私はその基本を守っただけです。結果として「教養」に近いものが生まれ出た、というところでしょうか。

大学院時代のことですが、「飢え死にした院生はいない」という言葉が上級生から下級生に語り継がれていました。

希望がかなって
公民館の勤務になれたんで、
すごく面白い毎日です。

新潟市教育委員会
生涯学習部中央公民館事業係

小笠原将臣さん

OGASAWARA Masaomi

2004（平成16）年
教育人間科学部卒業

いい点も悪い点も活かしあいながら、より良いものを創っていくという過程の大切さを学生時代に学びました。

INTERVIEW
OB・OGに聴く
仕事

◆学びたいという一人一人の想いに応えていきたい

現在は新潟市中央公民館に勤務しています。主な仕事は、講座を企画し、その講座の講師依頼や事前準備、連絡調整、当日の運営などです。

私は、もともと公民館の志望だったんです。大学時代に、新潟市役所青少年課でインターンシップを経験したり、西地区公民館でまなび屋（※）という活動をしたりしていまして、公民館や青少年教育の分野に携わりたいと思い、市役所を目指しました。

実際に、希望がかなって公民館の勤務になれたんで、すごく面白い毎日です。利用者にもいろいろな活動をしている方がいらっしゃいますし、私が参加している地域学の「寺町からの会」では、集まるみなさん、個性の強い人ばっかりで、とても刺激になりますね。

今はまだ仕事をあまり任されていませんが、これからゆりかご学級や少年クラブ、ユースセミナー等も担当する予定です。ユースセミナーとは、青年対象で、去年は癒しをテーマにアロマセラピーなどをやったんですが、今回は若者から企画員を募り、講座を運営していこうという事業です。公民館は、若い人の利用者が少ないので、ぜひこの機会をもって利用してもらおうと考えています。

実は、私も大学生になるまでほとんど公民館を利用したことがなかったです。ですが、西地区公民館での「まなび屋」という活動を通して、公民館に愛着や興味を持つようになりました。

「まなび屋」の活動を含め、学生時代の活動によって、価値観が広がりましたね。たとえば、いろいろな考えを持った人と話し合いをしていく中で、押し付けてもお互い納得できないということもわかりましたし、その中でどうやって集約していくか、決めていくかと考えるようになりましたね。あとは、自分だけが考えているわけじゃなくて、それぞれがいろいろな風に考えていて、いい点もあって悪い点もあって、それを活かしあいながらより良いものを創っていくという過程も大切なんだと学びましたね。

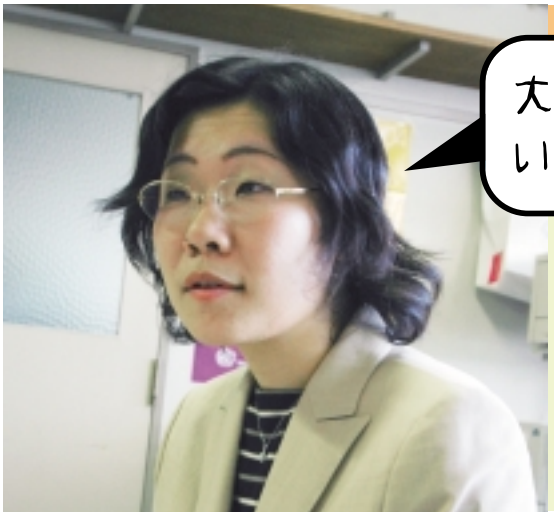
ただ、私は大学の勉強はあんまりしてなかったです。卒業論文は、大好きなサッカーを取り上げ、サッカーが地域に与える影響というテーマで書きましたし…。

今の仕事に就いて、まだ2カ月ですが、利用者に印刷機の使い方を教えて、ありがとうと言われたとか、そういう小さなことが仕事の喜びになっています。今後は、いろいろな人と関わり、ニーズのある人たちをつないでいけるような仕事をしたいです。せっかく、こういうことをやりたいと思っている一人一人の想いに応えていけたらいいなと思います。

最後に在校生へのメッセージですが、あんまり勉強しすぎてもだめで、遊びすぎてもだめなんですが、多くの人と関わることが大切だと思います。関わる中で自分の考えをしっかり築いていってください。公民館職員としては、学生のみなさんにぜひ公民館を利用してほしいですね。

まなび屋での活動の1コマ。下段中央が小笠原さん。

※「まなび屋」とは、西地区公民館と新潟大学教育人間科学部学習社会ネットワーク課程の合同事業であり、放課後の子どもの居場所づくりを学生中心で運営しています。学校では習わないことを体験し、異世代間の交流をするフリースペースです。



大学生の時って時間がいっぱいあるので、
いろんな方と会う機会を持ってほしいですね。

独立行政法人
医薬品医療機器総合機構
医療機器審査部

藤山　友紀さん

FUJIYAMA Yuki

2000（平成12）年
歯学部卒業

◆医療用具の審査を行っています

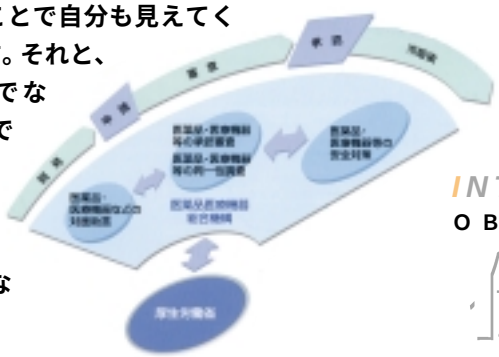
平成12年に歯学部予防歯科学講座に入局し、平成15年から現在の職場に在籍しています。メーカーからの医療用具承認申請に対して、世に出していいものかどうかという審査を行なっています。仕事は薬事法という法律のもとで動いています。歯学部では薬事法なんてそんなに深く勉強しませんでしたから今でも苦労しています。法律は難しいですね。

医療全体の中での歯科の位置づけが見えてきたことが自分にはすごくプラスになっています。歯科といっても結局は医療の中の一部ですからね。それは歯科ではなくて、違う分野に飛び出したから見えてきたのだと思います。まだ漠然とした感じではあるんですけど、歯科以外の方々に歯科のことを分かっていただくにはどうしたらいいかという方法も見えてきたように思います。

新潟大学歯学部を選んだきっかけは、小さい頃から親に女の子だから資格を取って手に職をつけて、一人でも生きていかれるようにと育てられたことですね。兄が薬学部に進んだことも影響して、医歯学系がいいかなと高校の時に思いました。それと、父が歯槽膿漏だったことも影響しているのかな。その後、歯科保健をやりたくて予防歯科学講座に入局しました。多くの人が歯周病の予防などで歯科保健の恩恵を得ることができればいいなあと思っていました。歯科保健をするには多くの人と関わっていくことが必要だと思っていました。そこで、歯科以外の分野も携わることができる仕事を今はしています。

歯学部にいて歯科関係の行政に関わる仕事をやりたいという人は少ないです。はじめ私もそうだったんですけど、歯学部に入る人は歯の治療をやりたい人が多いと思います。だから私は変わり者って自分では言っているんです。でもいろんなタイプの人がいていいと思うんですよ。同じタイプの人ばかりいても発展がないのではないのかな。変わっていくこともできないと思うので、変わり種が一人や二人いてもいいかなと思っています。学生時代は弓道部に入っていまして、全国大会に向けての練習や遠征にみんなで行ったのが印象に残っています。あとは歯学部の6年生の時、総合診療室で実際の患者さんを治療させていただいたことが思い出ですね。

大学生の時って時間がいっぱいあるので、いろんな方と会う機会を持ってほしいですね。自分の学部以外の人と会ったり、他の先生とお話をする機会を持っていろいろな方の意見を聞くと自分がどうしたいのかがきっと見えてくると思います。自分の持っている世界の他にも世界があるから、それを知ることで自分も見えてくると思います。それと、堅苦しいのでなくていいので一つでも目標を持って生活をしてもらいたいなと思います。



いろんなタイプの人がいていいと思うんですよ。同じタイプの人ばかりいても発展がないし、変わっていくこともできないと思うので。

INTERVIEW
OB・OGに聴く
仕事

事務作業や資料づくり、
企画を作るにしても、とにかく何でも、
できないと言わずやっていました。

NPO法人まちづくり学校
事務局長

大野　国寿さん

OHNO Kunihisa

2001（平成13）年
大学院自然科学研究科卒業

いろんな人に関わって、
いろんなものに触れられたら
すごく楽しいんじゃないかな。

INTERVIEW
OB・OGに聴く
仕事

◆気軽な気持ちで参加して、もう3年

NPO法人まちづくり学校（※）の事務局として、それを収入の糧として生きています。事務局ですので、いろんな事業に関わったり、連絡調整等の仕事をしています。今は、新潟市のまちづくり講座や新潟駅の建て替えに伴う市民参加のプロジェクト、小張木関屋線という都市計画道路の見直しの検討会に向けた事業に携わっています。

僕がまちづくり学校に就いたきっかけは、学生時代、新潟大学工学部で、都市計画や景観を扱っている研究室にいたんです。大学院1年生のときに、就職活動をし、参加型の事業を中心にやっている計画系コンサルタントを志望していました。ですが、なかなかうまくいかなかったんですね。そうこうしているときに、NPO法人まちづくり学校というのができて、どんなことをしているのかもよくわからず、気軽な気持ちで参加したというのがまちづくり学校との出会いですね。卒業後、半年ぐらい立った頃、事務局をやらないかと言われまして…それからもう3年たちましたね。

まちづくり学校の事務局になった最初の1～2年は何にでも関わろうという気持ちでやって、本当に何でもやりました。事務作業や資料づくり、企画を作るにしても、とにかく何でも、できないと言わずやっていました。そんな中で、大事なところは一緒なのかなと気づき、様々な事業がつながり全体像が見えてきましたね。

大学時代に学んできた都市計画や景観は、今すごく生きていますよ。結局考え方とか、景観ってすごく感性的なところがあって、人がどうやったら居心地がよく感じるとか、風景や自然の意味、そこの地域にとっての位置づけとかを踏まえながらプランニングすることを学生時代に学んだので、今、まちづくりに携わっていても素直に入っていけるんですよ。

学生時代の思い出は、建築学科の製図室で朝まで課題をしていたことでしょうか。仲間とバカ話をしながら図面を書いたり、模型を造ったり、小説や映画の話、写真の話をしながら朝を迎えることが多かったです。建築学科にいた学生としてはそれが一番の思い出です。自由な雰囲気で、楽しみながら研究していましたね。製図室でずっと一緒だった人とはつながりがあって、今でも飲みに行ったり、仕事での関わりも生まれてますね。

先日、まちづくり学校事務局に新潟大学工学部建築学科の学生から、NPOへの就職を視野に入れているという内容のメールがきたんですが、学生時代は、とにかくいろんな人に関わって、いろんなものに触れられたらすごく楽しいんじゃないかと思います。おもしろい事業や話があったときは、こういうのがあるよとか、これ来てみないという感じで学生もつなげられたらいいなと思っています。

僕もちょっと動いてみて、何かよくわからないけど、面白かったり、いろいろな人と出会ったりする中で、今の仕事につながっていったので、新大のあたりから一歩外に出ると広がっていくかもしれないですね。

※まちづくり学校は、新潟県内外でやわらかな参加型のまちづくりに携わり、人材の育成に努めている有志らによって設立されたNPO法人です。新しい時代に役立つ公益のコーディネートを事業の方向性として、人材育成を中心に事業を展開しています。

もともと人に会って話を聞いて、
自分に取り込むことが好きだったんです。

株式会社テクスファーム
事業開発グループ

村越　啓子さん

MURAKOSHI Keiko

2004（平成16）年
法学部卒業

後で社長から「学外のことに打ち込んでいたことがプラスに働きました。」と言われました。

◆フリーペーパーの編集で多忙な毎日です

株式会社テクスファーム事業開発グループに勤務しています。そこで『soda.（ソーダ）』というフリーペーパーをつくっています。広告企画、営業、取材、編集、制作、配布まで全部やっています。クライアントからお金をいただいて、読者に無料で提供するのがフリーペーパーです。新潟市内で若い人たちが集まりそうなところに専用のラックを置いていますし、県内のセーブオン全106店舗にも置いています。

初めての仕事の時エステのお店に一所懸命売り込みをやったんですけど、写真の写りがよくなくて、校正を持って行ったら「こんなんじゃ載せられない。」ってすごく怒られました。初めてなのでどうしていいか分からなくて、会社でも怒られました。結局、撮り直して何とかOKが出ました。もうこのお店には一生行けないだろうなと思ったんですけど、お店の女性オーナーとマネージャーが、働く女性に優しかったんです。「こういう経験は絶対無駄にならないから、今はがむしゃらにやんなさい。」入社1カ月足らずの失敗した人間に、いろんなことを教えてくださる。そういう人生の先輩に会えたというのは嬉しかったですね。いろんなところに先生がいる感じで、すごく面白いです。

『やぶへびひろば』というまちづくり情報誌の編集委員になったこと。それと同じ頃『新大広報』の編集委員になったことが、この業界に入るきっかけになりました。もともと人に会って話を聞いて、自分に取り込むことが好きだったんですね。それで、新聞記者になりたいと思って3年生の終わり頃から意識して勉強を始めたんですけど、あっけなく落ちてしまって。その後もいろいろと活動していたんですけど、なかなかうまくいかず投げ出しそうになった時に、この『soda.』の正社員募集という記事を見て受けたんです。入社試験の時、『やぶへびひろば』と『新大広報』を見せて、こういうものをつくっていましたと売り込みました。後で社長から「学外のことに打ち込んでいたことがプラスに働きました。」と言われました。役立ちますよ。『新大広報』編集委員は。

よく大学生活はいろんなことをしなさいとか夢を見つけなさいとか言いますけど、過ぎてしまえば何でもいい思い出になるので、だらだらしていてもいいです。日々流される時間というのは、絶対にその時にしかないです。そんな中で、自分はこういう人になりたいという種みたいなものをどれだけ自分の中に蒔けるか。将来を考えた時に引き出しのひとつになると思うんですよ。無理に芽を見つけようとしなくてもいいから、とにかくいろんな人に会って自分の中に種をたくさん蒔いてほしいです。就職活動は大変なんですけど、私みたいに特別勉強しなくても何とか社会人になれるんで、やっきになって就職活動しなくていいですよ。大事な時間ですよ。4年間は…。

Niigata『街の上級者』創造マガジンsoda.5月号。
人、食、ファッションなどクールな新潟情報を毎月紹介。

INTERVIEW
OB・OGに聴く
仕事

健康コラム

うつ病の話

保健管理センター　講師
坂戸　薫

近年、多くの大学において優秀な学生が、心理面の困難のために充実したキャンパスライフを送れないでいると聞きます。諸外国の調査では、うつ病のような精神疾患がこうした困難の背景にあることが示唆されていますが、おそらくわが国の場合も同様であると考えられます。うつ病については最近マスコミなどでもよく取り上げられるのでご存じの方も多いと思います。しかしうつ病は「心の風邪」などと軽く見る風潮があるようなので問題があります。慢性的に経過したり自殺を試みる者も少なくないので甘く考えることはできません。またうつ病はまれな疾患ではありません。最近の報告では、うつ病の有病率は１～５%、すなわち100人のうち１～５人はうつ病の人がいることになります。生涯有病率といって一生涯生きていくと何%の人がうつ病になるかという統計報告では13～17%といわれています。つまりかなりの人が一生涯のうちにうつ病あるいはうつ的な状態になるということになります。しかしいたずらに恐れる必要はありません。現在では有効な治療法が確立されており、きちんと治療すれば半数以上の人が治る病気なのです。より良いキャンパスライフを送るためにもこれを機会にうつ病について少し知識を深めてみませんか。

さてうつ病とは一体どんな病気なのでしょうか。悲しいことがあったり、大きな失敗をしたときなどは、誰でも気分が落ち込み、食欲がなくなったり眠れなくなったりしたことがあると思いますが、うつ病はこれがひどくなって、そのまま治らなくなってしまった状態と考えて良いでしょう。実際どの位ひどければ病気と呼ぶのかについては一概には言えませんが、「１日中続き、どんなにいいことがあっても改善しないような嫌な気分（抑うつ気分）」または「それまで興味のもてたどんなことにも興味がなくなった状態（興味喪失）」のうちの少なくともどちらかがあって、全部で５つ以上の症状が少なくとも２週間以上続いた時に、うつ病と診断することになっています。参考までにわが国でも広く用いられている米国精神医学会が作成したうつ病の診断基準（抜粋）をあげておきます。

A.下記の９つの症状のうち、５つ以上が同時に２週間存在している。５つ以上のうち少なくとも１つは、①か②である。
①ほとんど１日中抑うつ気分がある。
②ほとんどすべての活動の興味や喜びの著明な減退
③いちじるしい体重減少あるいは増加
④不眠あるいは睡眠過多
⑤精神運動抑制あるいは焦燥
⑥易疲労性、気力の喪失
⑦無価値感、罪責感
⑧思考力・集中力の減退、決断困難
⑨希死念慮、自殺企図
B.（省略）
C. 社会的、職業的な機能が障害されている
D. 薬物や身体疾患によるものではない
E. 離別によるものではない

うつ病の治療は抗うつ薬と呼ばれる薬を使って行います。以前は副作用の強い薬が多かったのですが、最近は副作用の少ない薬が開発され一般的に使われています。抗うつ薬がすぐ効かないからといって、治療をあきらめてはいけません。最終的には電気けいれん療法という治療法を使えば、かなりの患者さんが治ります。なおカウンセリングは、単独では有効ではありません。軽症うつ病に対しては、対人関係療法、認知療法といった精神療法は、効果があることが報告されていますが、こうした療法を行っていることを表明している施設はわが国にはほとんどありません。カウンセリングが有効なのは、病気とは言えないレベルの対人関係の悩みや心因性の病気（ヒステリーなど）に対してであると理解して下さい。

以上うつ病について簡単に述べてきましたがいかがでしたでしょうか。本年度より保健管理センターでは本学学生のメンタルヘルス向上計画の一環としてうつ病の自己診断が行えるホームページを開設しています。興味を持たれた方、気になる方は一度訪れてみてください。
(http://www.niigata-u.jp/aoki/mental1/intro_j.html)

保健管理センター【五十嵐地区】
Tel.025-262-6244　Fax.025-262-7517
旭町分室【旭町地区】
Tel.025-227-2040　Fax.025-227-0748
利用時間／8:30～17:00（土・日曜、休日は除く）

こちら就職部

就職部就職課から

みなさんは、就職部を知っていますか？
場所は総合教育研究棟２階の学生玄関を入って右手です。
全学生を対象とした就職相談を随時実施し、各種ガイダンス及び講座の開設、就職情報検索用パソコンなど充実した設備を備えています。また、キャリアインターンシップも実施しています。
学生のみなさん、各種情報収集などの場として気軽に利用してください。

就職情報関係メールの配信

学生のみなさんに大学から配付されている電子メールアドレスに就職情報（求人情報、ガイダンス日程、説明会情報等）を随時配信しています。**貴重な情報**ですので必ずチェックしてください。

学生用電子メールの利用法

パソコンのある場所なら、どこでも利用ができます。

1. **総合情報処理センターのＨＰ http://www.cc.niigata-u.ac.jpを開く**
2. **[学生向けサービス] をクリック**
3. **ユーザー認証。ユーザー名とパスワードを入力してください。（学務情報システムと共通のアカウントです。）**

卒業・修了時には届出を

今年度卒業・修了予定者へのお願い

平成17年3月卒業・修了予定のみなさんは、卒業・修了後の進路が決定次第**「進路内定届」**を所属学部等の学務係へ**必ず全員提出**してください。（進路未定の場合も同様に提出してください。）
また、「就職活動体験記」の提出もお願いします。
みなさんの後輩の就職活動に強い味方となります。

就職活動体験記記入フォーム

http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/ep/001/taikenki.doc

平成１５年度　学部卒業生の主な就職先

人文学部

(株)新潟ダイハツモータース
ＪＡ共済連新潟県本部
(株)トップカルチャー
新潟リコー(株)
(株)原信
北陸地方整備局
新潟県庁
新潟県警察
新潟市役所

教育人間科学部（教育学部）

(株)北越銀行
ＪＡえちご上越
新潟ゼロックス(株)
(株)原信
(株)PLANT
警視庁
新潟市役所
長岡市役所
公立･私立学校教員

法学部

(株)七十七銀行
セコム上信越(株)
(株)新潟日報社
(株)北国銀行
(株)本間組
警視庁
北陸地方整備局
新潟県庁
新潟県警察

経済学部

(株)第四銀行
(株)山形銀行
(株)大光銀行
新潟縣信用組合
(株)原信
関東経済産業局
新潟県庁
新潟県警察
新潟市役所

理学部

(株)ジェイマック
アークランドサカモト(株)
鳥居薬品(株)
(財)新潟県環境衛生研究所
(株)ブルボン
警視庁
新潟県庁
新潟県警察
秋田市役所

医学部保健学科

新潟大学医歯学総合病院
新潟市民病院
新潟県労働衛生医学協会
新潟こばり病院
虎ノ門病院
国立国際医療センター
慶応義塾大学病院
(株)アルプ
新潟県庁

（注）医学部医学科、歯学部は除く

工学部

東芝ホームテクノ(株)
松下半導体エンジニアリング(株)
東日本電信電話(株)
東日本旅客鉄道(株)
旭化成ホームズ(株)
警視庁
関東地方整備局
新潟県庁
新潟県警察

農学部

(株)ウオロク
一正蒲鉾(株)
ソリマチ(株)
佐藤食品工業(株)
ファイザー製薬(株)
関東地方整備局
北陸農政局
新潟県庁
新潟県警察

就職部就職課

TEL：025-262-6531、6087
FAX：025-262-7579
E-mail：shushoku@adm.niigata-u.ac.jp
利用時間　9：00～17：00（土日、休日は除く）

新たな時代を支える法曹を養成する

大学院実務法学研究科（法科大学院）

大学院実務法学研究科は、法曹（弁護士、検察官、裁判官等の法律専門職業人）の養成を専門的に行うわが国で初めての専門職大学院（法科大学院）として2004年4月に開設されました（入学定員60名）。

これまでの法曹養成制度は、日本で一番難しい国家試験といわれる司法試験（合格者年間1500人合格率約4%）に合格した後、「司法研修所」という、法曹になるためのトレーニングを行う教育機関に入所し、1年半の研修を受けるというものでした。しかし、21世紀の司法を支えるためには、法曹の「質・量」を大幅に拡充する必要があることから、現在の法曹養成制度を改革し、新たな法曹養成制度を作ることとなり、その中心的な機関として誕生したのが法科大学院です。

21世紀の司法を支えるのにふさわしい能力・資質をそなえた法曹には、専門的な法律知識だけではなく、それを批判的に検討し、また発展させていく創造的な思考力、具体的な法的問題を解決していくために必要な法的分析能力、法的議論の能力、高度専門職業人としての責任感と倫理観などが必要とされています。

またわが国の弁護士の総数は約2万人ですが、その約60%が東京、大阪といった大都市に事務所をかまえています。その結果、新潟県と隣接各県を合わせた人口比に占める弁護士の総数は、東京都の10分の1にすぎないのです。しかも、地方の場合でも県庁所在地などの中心都市に弁護士が集中（新潟県の場合、新潟市と長岡市で弁護士総数の約86%）しています。大都市に限らず地方でも病人のために医師が必要とされるように、地方でも「国民の社会生活上の医師」としての法曹、とくに弁護士が必要であることはいうまでもありません。しかし、国民が法的保護を受ける可能性は、居住する地域により著しい格差があるというのが実情なのです。

大学院実務法学研究科は、21世紀の司法を支えるのにふさわしい能力・資質をそなえ、こうした弁護士過疎地域における「住民のニーズに即した法的サービスを着実に提供でき、地域住民の信頼と期待に応え得る法曹」を養成するために、いま活動を開始したのです。

幅広い資質を持つ創造的な人材を育成する

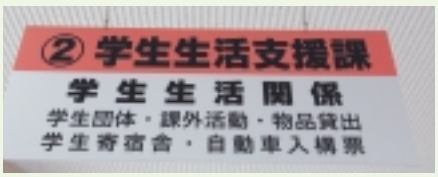
ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（以下、VBL）は平成15年に設置が認められ、平成16年3月に建物が完成しました。VBLの設置目的は、大学院生を中心とした若手研究者の柔軟な発想を生かしてベンチャー・ビジネスの萌芽ともなるべき独創的な研究開発を推進し、高度の専門的職業能力を持つ創造的な人材を育成することにあります。研究後継者の養成を主な目的としているものではありません。新産業創出のための独創的な研究開発を主眼とすることから医工連携を基礎としたメカノメディカルサイエンスによるヒト同化型インスツルメンテーションの開発プロジェクトがスタートしております。正しく本学が掲げる超域研究に相応しい、研究科・専攻の枠を越えた、様々な分野の研究者の協働によって幅広い資質を持つ人材、即ち、ベンチャー精神に富んだ創造的人材育成のための教育研究が行われています。

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長
原　利昭（工学部）

問い合わせ先／電話025-262-7002

まずは扉を開いてみませんか？



★学生生活を送る上で
困ったことがあったら
気軽に訪ねてきてください。

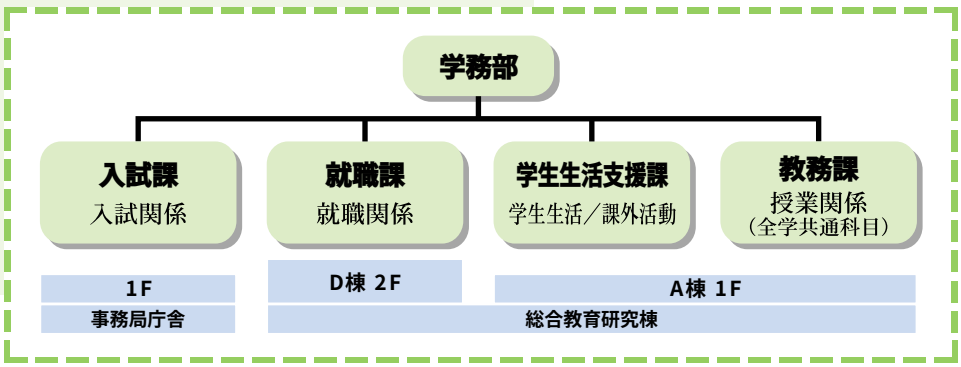
★私たちは学生さんたちの
健康と安全を願っています。

新大生の心強いパートナー

学生生活支援課

学生にとって大学への入口が入試課で出口が就職課、授業に関することは教務課が担っていることはお分かりでしょう。

学生生活支援課は今までサービス室で行っていた奨学金、授業料免除、寄宿舎（学生寮）、保健管理、相談業務と学生課で行ってきた課外活動等の業務を併せ、学生生活をサポートする課として生まれました。学生さんがより気軽に利用しやすいような雰囲気づくりを心掛けています。事故や病気がなく、健全な学生生活を送ってほしいと思っています。



黎明祭

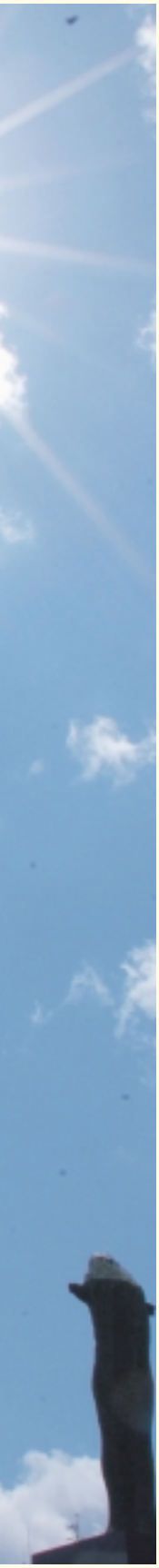
今年度の黎明祭は4月24日の土曜日に行われました。今年度の企画は音楽系サークルのステージ、部活動の紹介ブース、無料とん汁サービスが主な企画でした。

まず、音楽系サークルのステージですが、新潟大学の音楽団体が約一時間おきに入れ替わってライブを行っていました。今回は屋外ステージではなく、大学会館の大集会室で行いました。新入生は、あまり良くない天候のわりには足を運んでくれたようです。そのおかげでライブの雰囲気は良くなり、盛り上がったようです。

無料とん汁サービスは気温が上がらなかったため、八百食分のとん汁がみるみるなくなってゆき大好評でした。

部活動の紹介ブースもいろいろな部活動団体が参加してくれて、なかなかにぎやかだったと思います。

これらのイベントを開催するにあたって、黎明祭の役員は二カ月くらい前から準備を始めていました。今回の黎明祭は、例年より約一カ月半も早く開催されました。なぜそれだけ早くなったかというと、もともとの黎明祭の趣旨である、新入生歓迎・開学記念のうち新入生歓迎ということを重視して四月に行われたのです。しかし、僕たちが役員になった時期が二月の中旬だったので、役員決定と同時にいきなり黎明祭という大きなイベントの準備が待ち受けていることとなり、多くの人は戸惑っていたと思います。僕もはじめはまったく心の準備ができてなかったので、何をどうしたらいいのか全くわかりませんでした。でも、時がたつにつれて、実行委員長としての責任が少しずつ増していき、行動も少しずつ積極的になっていきました。



しかし、実行委員長というのは本当に肩書きだけで、多くの仕事は去年も役員だった人達等に助けてもらっていました。やっぱり人間は一人だけではやっていけないと実感しました。

今回の黎明祭は「新歓祭り」という毎年四月半ばに行われている行事と合同で行い、そのため準備をする上でいろいろややこしくなった面や、すんなり仕事がかたづいた面もありました。そのこともあってか二カ月の準備期間は僕にとっては少し短かった気がします。黎明祭の一週間前に企画がまとまったりと、いろいろと大変だったと思います。

なんだかんだ言って、今回は新入生もなかなか来てくれたので、それなりに成功したのかと思います。しかし、改善するところも多々あるので、いろいろな人の意見を聞いて、来年からは今よりずっと楽しく、また大勢の人が来て盛り上がるような黎明祭になってほしいです。

最後になりましたが、僕を大いにサポートしてくれた役員の皆さん、黎明祭に参加してくれた各団体の皆さん、そして何より黎明祭に足を運んでくれた新入生の皆さん、この場を借りて感謝したいと思います。ありがとうございました。

黎明祭実行委員長
工学部2年　吉野幹